

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 フィールドリサーチ領域
田口 浩継

【論文題目】

現代日本の森林問題における木育の意義に関する研究
—森林化社会に向けた都市住民活動の分析視角から—

【授与する学位の種類】 博士（公共政策学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文『現代日本の森林問題における木育の意義に関する研究—森林化社会に向けた都市住民活動からの分析—』は、2007年に林野庁が提唱した木育活動（「木材に対する親しみや木の文化への理解を深めるため、材料としての木材の良さやその利用の意義を学ぶ、木材利用に関する教育活動」）を受け、「熊本ものづくり塾」として、著者が独自に実践的に展開した社会運動の生成から発展の社会過程を社会運動論的に分析したものである。

氏は、「熊本ものづくり塾」の木育活動を、①林野庁の木育が木材消費の向上を目指した消費者教育に傾斜していることを批判し、②環境保全活動に見られる住民の利害対立を軸とした住民運動でもなく、③里山保全活動のような特定の価値意識と卓越的行動様式を持つ市民運動とも性格を異にする、④人間と木や森との関係性・親和性を生活の中から再認識・再構築する「森林と人間との関係回復」のための社会運動の一貫であったと分析する。特に現在、森林から社会的・文化的にも最も遠い位置にいる都市住民への「森林親和運動」として捉えている。そして、本論文では、「森林親和運動」や「森林化社会」（脱工業化社会と類似の概念）の価値を検討することよりも、この運動の組織的展開やその効果などの社会過程の分析に重点を置いている。それ故、本論は、環境保全的領域と学習・教育的領域と社会運動的領域との複合領域を学術的に扱った数少ない研究であり、その独創性は非常に高いものがある。

本論文の構成は、序章 森林に関わる問題と関心、第1部 森林化社会と森林を取り巻く状況、第2部 森林親和運動としての木育、3部 森林化社会における木育の現代的意義、終章 森林が社会への展望によって構成されている。第1部で従来の文献サーベイを軸に木育および森林化社会への社会的潮流と理論的展開の分析を行い、第2部で「熊本ものづくり塾」の実践的展開の分析をおこなっている。第3部は、都市住民を対象とした活動の持つ「森林化社会」への展望性を、カネ・モノ・ヒト・クラシについて生活農業論的視角を援用して分析を行っている。

「熊本ものづくり塾」は、2007年に設立された任意団体であり、森林・林業系の行政・企業の関係者、教育関係者やNPOなどのスタッフによって運営され、活動内容は、「木について知る・触れる・使う」の木育活動の3つの基本点を軸に、熊本県内の子供とその保護者を対象に体験教室を開いている。年間1万1千人の参加者は、特筆される参加人数であり、「正統的周辺参加論」（多様な目的を持つ人々が、事業に参加する中で、その事業課題のより高次の順応を示す）の実証的モデルとして位置づけている。また、学校教育の中で木育活動の効果測定を教育学的視点から分析している。このように、教育学的見地からの知見と社会運動論的な知見の融合体としての性格を持つ論文である。

以上の論文に対して、審査委員会からは、運動論の概念整理が曖昧であり、論の射程が十分見えてこない、教育学的アプローチと社会学的アプローチの接合が不十分である等の指摘がなされた。しか

し、本論文が、木育と言う実践的には捕捉できるが、学問的には非常に把握しづらい複合領域に学術的メスを入れた功績は、学問的に高く評価された。よって、本論文が熊本大学社会文化科学研究科の博士論文として適格であると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

平成24年1月12日に行われた口述試験の結果、申請論文が学位を授与するに足りる水準にあり、かつ十分な研究能力を有することが確認された。よって本委員会は、一致して、田口浩継に博士（公共政策学）の学位が授与されるに相応するものと判断した。

【審査委員会】

主査	徳野	貞雄
委員	牧野	厚史
委員	鹿嶋	洋
委員	伊藤	洋典
委員	松浦	雄介